

孤独と脳

育児放棄（ネグレクト）が脳にどのような影響を与えるかを調べている横浜市立大学の高橋琢哉教授（生理学）のグループは、「乳幼児期のラットを母親と他の子どもから引き離して孤立させると、環境に適応したり新しいことを学習したりする脳の回路に異常が生じる」ことが分かった、と米医学誌（オンライン版）に発表しました（6月20日付朝日新聞）。

子どもの脳は身体的な経験を通じて発達していくものであり、「この重要な時期に虐待を受けると、厳しいストレスの衝撃が脳の構造や機能に消すことのできない傷を刻みつけてしまう」といわれています。

実際、子どもの頃に激しい虐待を受けると、脳の一部が旨く発達できず、それが大人になってからも様々な精神的トラブルの要因になっているという事は、多くの研究結果から明らかになっています。

児童虐待によって脳に障がいが生ずるのは、脳自身が虐待を感じないようにするため環境に適応した結果だという説もありますが、だとすると余りにも悲しい事です。

今回の高橋教授らの研究は、虐待が暴力や暴言といったものだけではなく、成長の過程で、孤独な状況に置かれた場合にも脳の発達に大きな影響が生ずることを明らかにしたものです。

今回のネズミを使った実験では、ラットを人間の幼少期にあたる生後4～7日目、又は7～11日目にかけて毎日6時間1匹だけで飼育し、14日目に脳を調べたところ、「通常は記憶や学習に作用するタンパク質が神経細胞の表面に出現し、神経に伝わった情報を別の神経に伝える現象が起こるが、隔離したラットはストレスにより、タンパク質が少なくなっていた」ということです。

高橋教授によると、「育児放棄など社会的隔離の影響を細胞レベルで示したもの」としてはいますが、そうであれば、人でもラットと同じようにネグレクトによって脳に異常が起きている可能性は大きいと思われます。

今後、高橋教授らの研究によって、ネグレクトが脳に障がいを与えるメカニズムが解明され、治療法へと結びつくことを期待していますが、しかし、こう

した研究成果は如何に素晴らしいものであっても、どこか虚しさを感じます。

今も、日本の空の下で、親の愛情にくるまれて幸せであるべき子ども達が、親の育児放棄（ネグレクト）によって命の危険に晒されている子どもがいるかと思うと、胸塞がれる思いがします。

児童虐待防止が声高に叫ばれる一方では、皮肉な事に児童虐待は増え続けています。まるで、緑の大地に砂塵が吹き込み砂漠化していくような気配です。この荒れ果てて行く大地に、もう一度綺麗な花を咲かせなければなりません。

その為にも、教育関係者はもとより行政、医療機関、警察、児童相談所などあらゆる力の結集が求められているのです。（塾頭 吉田 洋一）